



横浜市立恩田小学校 発行 平成28年 8月29日  
学校だより 9月号

## 多くの感動をありがとう！

恩田小学校 校長 橋本匠司

今年の夏は、例年にも勝るとも劣らない猛暑が続きました。各地での最高気温が伝えられ、連日熱中症対策のために、いたるところで注意喚起がされていました。この暑さの中、恩田小の子どもたちはこの夏休みを元気に過ごしているだろうか、心配すらしてしまう日々でありました。

そんな猛暑の夏休みではありましたが、今年の大きな話題はやはりリオで開催されたオリンピックだったのではないのでしょうか。日本チームの活躍は目覚ましく、多くの選手がメダルを獲得することができたこと、とてもうれしく感じています。オリンピックにおいて成果をあげるためには、それまでの道のりの中に多くの困難があり、それを乗り越えたからこそ素晴らしい結果を得ることができたのだろうことは言うまでもありません。自分もずっとスポーツに携わってきた身から、各選手のたゆまぬ努力と関係者の大きなサポートには頭の下がる思いです。そんな素晴らしい結果の中、今回のオリンピックにおいて、体操個人総合銀メダルに輝いたウクライナのオレグベルニャエフ選手の言葉が非常に印象的でした。内村航平選手が鉄棒種目で奇跡の逆転優勝を果たした後、記者からの内村選手へのインタビューに対し「今の質問は無駄だと思う」「内村選手はこれまでも高い得点を出してきている」「得点は公平であった」という受け答えをし、多くの称賛を得たことはご存じの方も多いかと思います。スポーツにおいては、勝敗があることは当然です。誰もが勝利を目指し、そのために全身全霊をとって競技に打ち込んでこそ、そこには感動が生まれてくるのだと思います。しかしながら、勝者がいれば敗者がいることも必然です。善戦むなしく敗れてしまった、もしかしたらその時いかに行動していくのか、それこそがスポーツにとって大きな意味があるのかもしれないと、ニュースを見た時に私は感じました。さらにレスリングの吉田選手が4連覇ならず銀メダルに終わってしまった時のインタビューにおいても、同じようなことを感じたのです。結果は事実として残ります。ですが、その場面を創り上げた勝者と敗者、この両者が今後どのように生きていくのが大切なのではないのでしょうか。競泳での萩野選手と瀬戸選手、卓球での福原選手、バドミントンの高松ペア etc.今回のオリンピックでも本当に多くの感動をいただきました。9月からは続いてパラリンピックが開催されます。きっとオリンピックに負けない素晴らしい感動を与えてくれるのだろうと期待しています。

4年後には東京オリンピックが開催されます。もしかしたら、横浜の子どもたち、そして恩田小につながる子どもたちからもオリンピック選手が生まれるかもしれません。日々の生活の中では、上手くいく時も、そうでなく悔しい思いをする時もあります。でもそれは一人ひとりが今の自分にできる精一杯の努力をし、さらに相手のことを常に認めることによって、周りの人たちに感動を与えることができ、自分自身も成長していけることを忘れないでほしいと思います。夏休みがあげ、子どもたちが学校で繰り広げられる数多くのドラマに、また新たな感動がありますように。